

宇治田楽における芸能の変遷

1810854h 中谷美桜

1. はじめに

平安時代から鎌倉時代にかけて、宇治には本座宇治田楽と呼ばれる田楽を踊る職業集団が存在した。彼らは宇治の宇治離宮祭や近隣の祭りで田楽を踊っていたが、猿楽が発展するに伴い、次第に衰退、断絶し、伝統芸能と呼ばれるような祭りが宇治から消滅した。

1998年、宇治に伝統となるような祭りを作り上げるため、野村万之丞による「宇治大田楽復活祭」が開催された。しかし、市民が主体的に参加できないことから、2001年以降は「宇治大田楽」、2003年に「宇治田楽」と名前を変え、市民が主体となって祭りを作り上げるようになった。田楽は一度断絶したため、現在の宇治田楽まつりは平安時代の資料に残る田楽の特徴、日本を代表とする祭りの特徴を取り入れて市民の手で再興されたものである。

平安時代の宇治田楽、1998年に開始された宇治大田楽復活祭、そして2019年度の宇治田楽まつりを調査し、神事の一環であった芸能としての田楽が、現代において観光や地域振興と結びつきながら、いかなる芸能へと変化したのかについて明らかにする。

2. 方法

第1章では、第2章以降の検討の前提として、宇治田楽まつりの由来となった、平安時代の宇治田楽とはいかなる芸能であったのか、またなぜ衰退したのかについて、山路による研究書『宇治猿楽と離宮祭—宇治の芸能史—』に依拠して検討する。

第2章では、宇治大田楽復活祭について、第3章では、宇治田楽まつりについて、①地域への影響、②資金面、③担い手

の3点から、実行委員会の報告書、議事録、祭りの画像・映像等の史料を用いて、その実態を明らかにする。

最後に、結論として、それぞれの田楽を比較して、どのような芸能であったかをまとめ、宇治大田楽復活祭から宇治田楽まつりへの変化を、伝統芸能に求められる今日的な意味という観点から評価する。

3. 第一章 平安時代の宇治田楽

平安時代の宇治田楽は、宇治離宮祭の御渡の中で、本座宇治田楽という職業集団によって演じられていた。藤原氏の庇護のもと、多くの観客が訪れるほど人気であった。しかし、世の中の流行が猿楽に移行し、藤原氏が凋落すると、猿楽が祭りの中で重要な役割を担うようになっていった。

その後、荘園制度の崩壊により田楽も猿楽も活動の場を失うが、猿楽は力をつけた住民による氏神祭りへ進出し、存続した。一方田楽は神事の一環であり続けたことで、祭りとともに消滅した。

4. 第二章 宇治田楽の再興

地域振興のために宇治に伝統芸能を作り上げるといった目的の元、1998年から2001年の間に、野村万之丞が主宰する楽劇大田楽「宇治大田楽復活祭」が開催された。宇治大田楽復活祭は以下のような特徴を持つ。

①地域への影響

近隣高校がボランティアとして参加しており、地域に田楽を浸透させた。また、洛南タイムズなどの地方紙だけでなく、朝日新聞などの全国紙にも掲載され、地域を超えて注目された。

②資金面

資金の多くは文化庁、京都府、宇治市、青年会議所、企業、個人から支援されていた。特に協賛企業の多くは宇治に根付いた企業が多く、支援を行った 64 組の団体のうち、企業は 57 社、その内宇治に拠点を置く団体は 49 社である。実行委員会会長中谷が資材系の会社を経営していることから、協賛企業の多くは建設や製造を行う企業が多くを占める。

③担い手

担い手はプロか、市民の中でも経験があり、オーディションに合格した者のみが祭りに参加できた。裏方においても、条件を満たした者のみが参加できた。

このような宇治大田楽復活祭は、市民が参加できない、演目に宇治らしさがないといった理由で廃止された。

5. 第三章 現在の宇治田楽

2003 年以降は市民が祭りを企画する「宇治田楽」が開催されるようになった。現在の宇治田楽まつりは以下のような特徴を持つ。

①地域への影響

宇治田楽まつりは本祭の 10 月以外にも、地域のイベントに参加している。2019 年度は 16 回も地域イベントに参加しており、当時 2 回のみの参加であった宇治大田楽復活祭と比べると、地域での認知度は向上している。また、近隣高校の学生に田楽指導に行くなど、担い手の育成にも力を入れている。

②資金面

資金援助を行う団体は、宇治大田楽復活祭から、文化庁、青年会議所の支援がなくなったものの、支援を行った企業名を当日配布するパンフレットに

掲載する広告協賛を行った結果、協賛企業数が約 2 倍となった。

③担い手

宇治田楽は市民が主体となって行う祭りであるため、小学校 2 年生以上という年齢制限があるものの、誰でも参加でき、経験の有無にかかわらず自分のやりたい役割に携わることができる。

6. おわりに

以上のような結果から、現在の宇治田楽まつりは、伝統芸能になるべく、市民が主体となって作り上げることを目的とする祭りである。1998 年に、地域活性化のため、野村万之丞による楽劇大田楽を宇治で行う宇治大田楽復活祭の開催を契機とする。田楽が存在したということ印象付けるため、当初は市民との関係性よりも華やかさが重視された。

しかし、市民の主体性や宇治らしさに欠けるため、楽劇大田楽と合わせて市民オリジナルの祭りを開催するようになった。そして、現在のように市民が主体となった祭り宇治田楽まつりとなったのである。

このように市民の主体性を重視した祭りを目指したことから、誰でも自分の挑戦したい役割に携わることができる。また、積極的に地域イベントに参加したり、観客と一緒に踊る演目が組み込まれていたりするなど、市民を積極的に巻き込んだ芸能であることが分かる。

以上のように、現在の宇治田楽まつりは、宇治の伝統芸能になるべく、市民を巻き込む芸能という一面を有している。今後伝統芸能が存続するためには、「巻き込む」芸能として、地域社会からの広範な支持を得ることが重要であるといえるだろう。

(指導教員: 秋元 忍)